所引の経論を中心にした中観宝燈論の考察（二諦章一）

荷葉堅正

清弁（Bhavya）に帰せられた中観宝灯論（Madhyamaka-ratna-pradipa-nāma prakaraṇa）は、西蔵大蔵経中（北京版丹殊爾后編18函326a4–365a2）にのみ収められ、サンスクリット原文にも漢訳にも見出されない。

この論の研究であって、直接的なものは

(1) Stanislav Schayer: Notes and Queries on Buddhism (Rocznik Orientalistyczny XI, 1935, pp. 207–210)

(2) 山口益：中観説の綱要書（大谷大学研究年報第二輯 pp. 69–152）

である。その中で(2)は宝灯論の論文形態、引用経論、内容概観と内容して、詳細に論述され、この論を中観学派における中観説の綱要書という表題であらわされ、その結果、この論は比較的に後代の著作であり、清弁に帰することは出来ず、ただ清弁の学説に従い乍ら、密教的粉飾の多いことが明瞭にされた。ここでそれに学説上加へなければならないことは何も見出されない。ただその研究に指示されて、本文を追う道筋に於いて、遭遇した第二義的な校勘の結果を示すことにしたい。

山口博士が結論されるように、この論の作者が清弁ではなく、中観派の密教化という変遷がすすんでいる後代に清弁造と称しつつ、その変遷しつつある学説を綱要せられたものであり、その限り中観心論や般若灯論等に比して研究価値は少いともいはれよう。しかしながらこの小論が示している学説は後学の人を益していることは極めて大であるといわねばならない。一例をあげれば唯識学派の二流である有相唯識・無相唯識を具体的に学ばんとする人は先ずこの書を参見しなければならない。この

論の不了義実世俗慧第二章に有相唯識の論破・無相唯識の論破と次第して関説され、ここに説示されることが、そこで破される学派に関する数少い資料の一つであるからである。

また最近は後期の論書に於て、まとめられている学説によって、佛教全体を考察することもしば〳〵見られるので、その限りに於てこの小論も重要な資料といわねばならない。

一論は九分され、

㈠Bden-pa gñis-kyi skabs.
二諦章　326 a 1.7

㈡Kun-rdsob ḥkhrul-paḥi çes-rab-kyi skabs.
世俗乱慧章　330 a 1.2

㈢Draṅ-paḥi don-gyi yaṅ-dag-paḥi kun-rdsob-kyi çes-rab-kyi skabs.
不了義実世俗慧章　333 a 1.3

㈣Draṅ-paḥi don-gyi yaṅ-dag-paḥi kun-rdsob-kyi çes-rab-gñis-pa.
不了義実世俗慧章二　337 b 1.3

㈤Ṅes-paḥi don-gyi yaṅ-dag-paḥi kun-rdsob-kyi çes-rab-kyi skabs.
了義実世俗慧章　341 a 1.6

㈥Don-dam-paḥi çes-rab-kyi skabs.
勝義慧章　348 b 1.4

㈦Bsgom-paḥi rim-paḥi skabs.
修習次第章　348 b 1.8

㈧Slob-dpon-gyi shal-sna-nas-kyi che-ba brjod-paḥi skabs.
軌範師の大性を称讃する章　361 a 1.7

㈨phan-yon-gyi skabs.
功徳章　363 b 1.5

㈠は二諦の建立、二諦の義の説示、問答決択と次第し、
㈡は外教一般の徴難
㈢は声聞乗の不了義であることを説く
㈣は有相唯識の論破、無相唯識の論破
㈤は竜樹・提婆・月称の伝統を示しながら、二諦に入れしめようとする了義教の説示とそれに関する問答決択を開示する、
㈥は唯勝義諦を五偈を以て明示する。
㈦は中観宗における修習道の次第を説示する。
㈧㈨　観修利益分に相当する。

以上の如き内容であるが、㈠―㈦までで重要な学説は

終了している。その学説が清弁の中観心論思択焔に等同せられるものと、それ以後密教的に変って行った点があるということ容易に理解される。しかし密教的に変遷した跡が明瞭であっても、清弁の中観心論に等同せられる部分もあり、それらは極めて明瞭な形で一致するものと、そうでないものとがある。①

この論では簡単な表現で意味の取り難い処も、中観心論によって容易に理解される個処が随処に見られる。中観心論の中でも求真実智章に最も多く等同せられる部分の存することは云うまでもないが、その外㈢は中観心論の入声聞真実智章に等同する部分が多く、㈣は入瑜伽経真実決択智章に多く、㈡はその他の外道諸派の真実に入る諸章に、余り多くはないが等同される。

こうした点から見ると本論の了解に中観心論が重要な役割を果すことが伺われ、中観心論の研究に待たなければならない。畢竟して野沢博士の求真智章及入声聞真実章の和訳研究②・山口博士の入瑜伽行真実決択章の研究（佛教における無と有との対論）等が上記研究以外に本論研究の重要な参考書となる。

今もそれらの研究にも助けられて、理解したことである。

清弁の諸論に等同せられない部分については、比較的に後期に著作せられた中観論書及び密教系の経論に依ることが必要になって来るのであらうが、

今は次の点に先ず注意した。

本論は西蔵訳に一本だけしかなくて、梵蔵漢の完備している論に比して、資料的に必ずしも完全でない。

引用経論が極めて多い。題名が明らかにせられた経・儀軌・経論だけでも三十一種以上あり、経名・論名が明示されずに引用されるものは数倍以上ある。

この点を考慮して、引用経論を出来るだけその原の経論や他の諸論に引用されるものと照合せしめることによって、出来るだけ前に示される欠点を補い、理解を助けようと試み、若干の引用経論を照合し了った。その結果、中観学説を考究する本流に於いては、経はともかくとして、竜樹・提婆・月称の著作としてすでに確定された諸論の中に、その引用の論が含まれているか、いないかということが重要なことであり、それ以外は重要なことではない。と理解されるだけで、中観学説の考究をはなれて、後期の一論書の考究としても、こうした照合は無駄な事と思われる点がないではない。たとへば同じものを見出しても、文献の新古を断ずるに到らないものが極め

て多いし。同じものが相違した経名で指示されるものもあり、全てを資料として整理するに若干の疑問もあるが、初歩的な読解には助けとなった。

山口博士が「提婆曰くとして引用せられるものが、提婆作で偈文体として残存する唯一の論である四百論の中には見当たらない」（前掲書八二頁）といわれる

「有にあらず、無にあらず、有無（俱）にあらずと四句を解脱して中観者は真実を知達す」

なる偈文が Tattvaratnāvali（真理の宝環）の第二十五偈に如幻不二派の教理として示されるものと同一であることを、一例として、その他経論名の指示なしに引用せられたものに、引用句の照合により、経論名を明示することが出来たものも多くあったことである。（和訳にあたって引用句は「　」本文中の偈頌体のところは一字下げで示す。なほ和訳文は多く山口先生のものを依用させていただきました。）

これら全部については、別の機会に索引式に一覧に供することにして、今は始の二諦章を和訳し、照合の結果を註記することにする。

① 勝義の語義は、中観心論思択炎（北京版丹殊爾后編一九函 63a1-4）に三種に挙示され、勝即義（持業釈）と勝の義、勝なる無分別智の義（依主釈）と勝義を証得することに随順する慧には、かの勝義がある勝義相応（有財釈）との三種として示されるが、この論に於ては、二諦の義を説く項において前二者が例示され。中観学説として処々に見られる形に等同せられる。

同じ清弁の作である般若灯論には二種として示され、中観心論においては三種を挙げ、第三のものに中心を置くが如く示されている。このことが本論の直後に「諦は不虚誑なり」と説く文と併せ考究すべきことかとも考へられる。（野沢博士：密教文化　二九・三十　安井博士中観思想 p. 167-176 参照）

② 密教文化　二八―三一、三四、四三、四四、六六、六八、七四　密教研究　八八、大谷学報　二十二巻　三号　清弁の二諦説（日本佛教学会年報第十八輯）

二諦章

無量の功徳の依処となり、
過失の垢の除かれたる
三宝に敬礼して
二諦を描述するであろう

ここに苦の水が溢れ、煩悩と分別の波浪に擾乱せられた五趣の生類を救度するために、見の翳暗を残りなく除く宝灯（ratnapradipa）を説かねばならぬ。

茲に聖顕示法界体性無差別大乗経①に

「文殊師利よ、法界が量とせらるるときは世俗も無

く、勝義も亦無し」と

説かれた。しかも旦らく無知の障（kāça）によりて慧眼が遮滅せられて、大我執の心髄に入りこみ、無始以来物に執著（abhiniveça）して、此岸を見る諸々の愚者のために[2]二諦が分別せられるべきである。何となれば、比量を主勝（pradhāna）となす究理論者（tārkika）は真性（tattva）と佛身と智慧との現前しないものを（lkog-tu gyur-pa-dag＝parokṣa）観察し、伺察する〔道を〕以て知るにあらず。〔彼等には〕此岸を見る知のみあるが故である。

日輪は生盲の境にあらず。天は罪過あるものの境にあらず。真性とかの所成とは究理論者の境にあらず。大摩尼宝珠を観察するとき、盲者は如何して量であるだらうか。

その中、始めに世俗諦の建立は

毛髪輪と二月と水月と乾闥婆城と夢と幻化と陽炎と化と反響と鏡面の影像と影と水泡と虹と電光等の物は顕はれ見ゆる（bhāsate; driçyate）のみの世俗（saṁvṛitti）であり、芭蕉の幹の如し。未観察を領受する相を具し、因より生じ、作く功能があり（artha-kriyasāmartha）此岸を見る世俗である。

無始以来の無明の邪眠の夢の分位であり、此岸を見る〔ことに関係した〕能知と所知とは髪乱結（keçoṇduka）の如く、虚誑である。何となれば、虚誑は実に非れば、茲には先旧諸論師によって実世俗（bhūtasaṁvṛitti）と説かれているものは、かくの如く我等中観宗によって外と内の諸法は世俗性として何れも虚誑であり、改作性（kṛittrima）であり、幻の如く、夢の如しと許す。軌範師聖竜樹（Nāgārjuna）によって

「諸根によりて了得せらるるものが、もし実として有らんか、愚童さへも正智すべし。正智は何の要かあらん」（不可[3]思議讃（Acintyastava）18）

と説かれたるが故に外法は凡て虚誑性と説かる。

内の諸法は云何といはば、世尊によって、

「眼と耳と鼻とは量に非ず。舌と身と意も亦量に非ず。もしこれ等諸根が量なるとき、聖道は誰に於いて必要あらんか[4]」

と説き給へり。

軌範師聖竜樹によってまた

「諸根は無覚物（Jada）にして、不記であり、また量性にあらざるも邪に遍知せらるるものと汝は説けり[5]」

と説かれた。（不可思議讃 19）

かくして境と根とは実無き故に知もまた実無く、境と根が実無きとき住する知も実として成ぜらるることなく、依事は実なく、心と心所とも多く集れるが故に実として成ぜらるることはない。

分別のみの因縁より分別のみの果を生起し、虚誑にして無実なる因と果とが、もし生じ理に合しないならば、水月等は誰によって生ぜられるべきか。虚誑の因縁有らん限り幻は生じ壊し住す。

軌範師によって

「ここに生ずることはなく、滅することも何等なし。生と滅とは分別せられたる諸縁のみにあり」

と説かれ。[6]

軌範師月称（Candrakirti）によりて、

「始終無き三有に於いて、無明の邪眠によって彼々の趣（gati）が顕現するは、かれ虚誑にして夢の如しと立せらる」[7]と説けり。

それ故に外と内の物は虚誑であると成じたのである。

勝義諦は云何といはば、これもまた軌範師によって、根本中（Dbu-ma rtsa-ba）に

「不滅・不生・不常・不断・不異・不一・不去・不来にして、戯論寂滅し吉祥なる縁起を示し給へる彼諸説法者中の最上者に我れ稽首礼す。」[8]（第一品、帰敬偈）

と説けるこれなり。

次に二諦の義を説く。

世尊によって

「世俗といふは不堅（adṛiḍha）にして動（cala）なり。その諦は水月の如し。勝義諦といふは十八空なり」[9]と説き給うた。

それの意趣は次の如し。世俗というは現に顕われ見らるる如き〔色等の〕法である。

それは此岸を見る面に於いて、量であるから諦（satya）である。乃ちそれは世間的実用（vyavahāra）の意味において不顚倒である。

勝義諦（paramārtha-satya）という中、義（artha）とは観察せらるべく（parīksaṇīya）、解了せらるべき（pratipādya）である。勝（parama）とは最勝であり、義即ち勝〔持業釈〕にして勝義であり、またかの勝義は勝智（無上なる出世間智）の義であるが故に〔依主釈〕勝義である。諦（satya）は不虚誑である。

始業の（adikarmika）有情を勝義に入らしめるるために、この方便が等覚者によって階梯の如く説かれ、[10]俗諦を知らずしては勝義諦は知られず、俗諦を知りて勝義諦

に入る可し。俗諦とは即ち遍知せらるべき諸法の共相と自相を知るは世俗諦であり、世俗のかくの如く顕われ見られているものが、理を以て観察せらるるときは、何ものも得られない。その不可得なこと(mi-rñed-pa-ñid=anupalambha)が勝義である。それ故に世俗を知るべし。

世尊によって同じく

「世俗の法を先に解了せず、それを解了せずしては、勝義の法を解了する能はず[11]」

と説き給へり。

軌範師月称によって、

「方便となれる俗諦と方便より出たる勝義諦との二の分別を解了せざるときは、人は邪解して悪趣に行く[12]」

と説かれた。

これに異りて世俗を棄てた空性を執着するならば、治療し得ない見ある人であり、医師が見棄てた病人の如くである。

茲に余人は徴難す[13]

(1) 汝等は自ら蘊等の法を許して、而もそれを遮するが故に、立許の害あり[14]。

(2) 同様に別々に決定せる境に入る者自身にとっては、諸根の現量(性)によりて見ることより超えたる量は別にない、汝自らもまた諸境を領納し、世人も亦現量にて領納するが故に、それら〔諸境〕は有るに拘わらず〔汝の如くそれを〕遮するによって現量の害となる。

(3) かくの如く山中の施陀羅[15]等に於いて極成せられた堅、湿、煖、動等の法即ち世間極成の一切法を遮するが故に、極成の害がある。

④ 又汝は一切法は無であると見るが故に、断論となるによって、大乗にもあらず。

⑤ 佛の弟子にもあらず。

といはば、

それに対して答釈して曰く。

① 我等中観論者は、「勝義に於いては」といって立宗があるのであるから、立許の害はない[16]。色等のそれらの法が愚者の覚と相応して見らるるところには、それは遮遣せられざるが故に、それ故に所説の如く過失はない[17]。勝義の慧の前に於いては一法の分別せらるるに堪えたるものも存在しないから過失とならない。

② 分別して答破すべし。

所知と能知は無生なりと説かんがために、行聚（saṁs-kāra-samūha）は不動（acala）なるが故に、[18]諸根は無覚（ajaḍa）であるから、一境をも把握することは出来ない、聚より生ぜる慧は何れも俗なるが故に或ものが或ものによって現量と成れるところのものは我々に対して害となることあるべきも、現量覚の行境の色は何れも言い詮はし得ず（avyapadeçya）無体である。有為の故に、自の覚の如し。

又八事俱生のものと、それを了得する覚とは軍・林等の覚の如く、実としてあるに非ざるが故に、かくの如く現量なきが故に我々にとってそれの害はない。

(3) 我々にとって極成の害もまたない。喩へば眼が明瞭にして鋭利なるものは魔尼宝珠を解了するも、生盲と眼翳とによりて眼が破壊せられた人は解了せず、その態に非る如く空性見の眼薬に親近して、極浄無垢にして無碍なる慧眼を具せる賢者には領納の仕方によって、ここに無明の膜によって癡闇せられ、真性を見ることの出来ない眼翳ある者の如く、三界の種々なる物を虚妄分別するによって起された垢によって慧眼が覆われ、擾乱せられている不賢者の語の置かれる場所がないから極成の害はない。

(4) かくの如く断論も我等中観論者にはあらず。何となればそれら断論は次の如し。

「賢なる者よ、よく動き食せよ。死して狼の足跡の如し」[19]

と云々といって彼岸の世間を損減す。されど中観論者はかくの如く許さない。

聖提婆によって

「彼岸の世間を疑ふも、智者は悪を捨つ。
若し無ならばしからんも、若し有ならば断見を破すべし」[20]

と説かれた。

又世俗諦である見らるる mala は正にその如く、世俗諦は幻の如く許されているが故に如何なる過失の垢を以てするも、吾々を害することはない。

又勝義諦の慧といえる無分別智・法性菩提の心・自力起（svayambhu）の大智の前に於ては、何ものもなきが故に断論にも非ず。

たとえば、かくの如し。

虚空は広・狭・大・小・美香・不美香・甜酸・軟・辣ならんか。また驢・駱駝・馬等の角の色と形は云何ようであるか。尼拘楼陀樹（Nyagrodha）・優曇波羅（Udumbara）・虚空等の華の香は云何ようであるか。mdaḥa rgyu と

Kuça と Kaça と Bhidura の味は云何ようであるか。亀と蛇の毛と乾達婆城の女人等の触は云何ようであるかと問われたとき、ああ、士夫よ汝が領納せるものはあるか。我によってこれを見、知り、領受せるものは何等なし、といえるとき、彼士夫は無見論者と断見論者となるか。

此等諸佛の法はすべて、遮せらるべきもなく立せらるべきもなし。

諸法の法性不生のとき、何ものが遮せられ何ものが立せられるか。[21]

軌範師によってまた

「ここに遮せらるべきものは何ものもなく
立せらるべきものも無し
正性に於ける正見を、正しく見るとき解脱す」

と説かれた。

(5) 中観論者は佛弟子中の主なる者である。

かくの如く

「如来は常に生ずることなき法なり、
一切諸法は善逝と同じ
邪に錯乱せる覚を具せる愚夫は
世間において無なる法中に行ず」[22]と

説かれ。

「一切は空の自性であり、勝義としては有法もあり得られず、法性も有り得ず、執着を離れんがため縁が説かれるより別には、法の特性が語無くして述べられない。」[23]と、

説かれ、

「前際も空、後際も空、生住滅の関係を以てしても空、一切の有は常に空である。諸の外道は唯一方が空なりとなすが。[24]」と

説かれ、

「一切は虚空の相にして、虚空には全く相は無い。相と所相とを離れた汝に帰命する。[25]」云々と多くの経が説かれるによってかくの如く観察すべきであり、この義は広く次に釈すべし。二諦の章了。

① この句は第五章了義実世俗章にも引用せられ、そこでは聖文殊師利講演経(Hphags-pa hjam-dpal-gyi man-ṅag-gi mdo) の題名が冠せられている。これはチベット蔵経にも漢訳蔵経中にも見出されない。聖顕示法界体性無差別大乗経は大谷甘殊爾勘同目録 No. 760, 8. 大正蔵 310 (8) Dharmadhātuprakṛiti- asambheda-nirdeça. 法界体性無分別会第八であり、この句に相当するものは、北京版甘殊爾五一函 160a² に次の如く見られる。

Ḥjam-dpal chos-kyi dbyiṅs kyi raṅ-bshin-la ni kun-rdjob-daṅ/doṅ-dam-pa dmigs-su med-do この——のところが、引用句では tshad-mar byas-na になっていることが見出されるが、また漢訳は「文殊師利法界体性無有世諦第一義諦」（大正蔵十一巻143 C）

② ṇor bys-nas＝anurodha.

③ 影印チベット蔵経 No. 2019. に相当する。酒井真典、竜樹に帰せられる讃歌（日本佛教学協会年報一二四号）参照。

Dbaṅ-po・rnams-kyi〔D. kyis〕gaṅ dmigs-de/
gal-te yaṅ-ḍag yod gyur-na/
（——No. 2019: mchis）
byis-pas yaṅ-dag rig-par ḥgyur/
yaṅ-dag çes-pas ci-shig dgos/
（No. 2091. gnṅ-tshe yaṅ-dag çes-pas ci）

④ 月燈三昧王経（Samādhirāja-sūtra. ed. Das. p. 29）この引用句の第三句は、北京版に誤あり、デリゲ版によって訂正。

長尾雅人博士・西蔵佛教研究一一〇頁と註 No. 28 参照

⑤ 影印チベット大蔵経 No. 2019

Dbaṅ-po rnams ni bems-po daṅ/
luṅ-du-ma bstan-ñid daṅ ni/
（No. 2019 luṅ ma bstan-pa……）
tshad-ma-ñid kyaṅ ma yin dan/
log-par yoṅs-çes khyod-kyis gsuṅs
（No. 2019 は第二句と第三句は反対になっている）
酒井真典、同書参照

⑥ Ḥdi-na ḥgaha-yaṅ skye-ba med/
ḥgag-par gyur-pa cuṅ zad med/
skye-ba daṅ ni ḥgag-pa dag/
brtags-pahi rkyen rnamas kho-naḥo/

⑦ Thog mthaḥa med-paḥi srid-pa ru/
ma-rig-gñid-kyi〔D. kyis〕log-pa yis〔D. yi〕
ḥgro-ba gaṅ gaṅ snaṅ de-ñid/
brdsun de rmi-lam lta-bur ḥdod/
この第一句はデリゲ版にて補充

⑧ 中論 帰敬偈 梵文 p. 11

⑨ Kun-rdjob・ces-bya-ba ni mi brtan-pa daṅ/
gyo-baḥo//deḥi bden-pa ni chu zla lta-buḥo/
don-dam-paḥi bden-pa shes-bya-ba ni stoṅ-pa-ñid bco-brgyad-do. これは散文体の経文であり、未だ照合し得ない。

⑩ Tattvaratnāvalī. 三七偈

Ādikarmikasattvasya paramārthāvatāraṇe/
upāyas tu ayaṁ sambuddhaiḥ sopānam iva nirmitaḥ/
宇井伯寿博士、真理の宝環、名古屋大学文学部研究論集Ⅲ所収 p. 6, 29.

宝燈論において、これは引用句として説示されず、偈の形を以て意趣述べるものである。

⑪ Kun-rdosb-kyi chos sṅon-du ma soṅ shiṅ de ma rtogs-par don-dam-paḥi chos rtogs-par mi nus-so/

⑫ 入中論 (madhyamakāvatāra) 第八〇偈出版本 p. 175.

⑬ 以下の論議難決択については、中観心論第三章求智真実章下の勝義諦の項参照(北京版丹殊爾後篇一七函 63a¹–65a⁵)。

⑭ khas-blaṅs-pas gnod-do.

⑮ ri-khrod-pa = çabara. = 下賤民

⑯ 又立宗中以勝義諦簡別所立故
定無容如説違害。由此亦無違自宗過。
(大正蔵経三〇巻 269 b)

⑰ 若説総相説如思夫等一切世俗所生現量。
今此不遮世俗有故無容違害
(大正蔵経三〇巻 269 a)

⑱ 中観心論思択炎 (Tarkajvala) は、
「現量による害もない。
諸境は顚倒せるものであるから」といっている。(一七函 64 a⁴)

⑲ 月称・中論註 梵文二六〇頁

⑳ Ḥjig-rten pha-rol the tshom yaṅ/
mkhas-pas sdig-pa〔= p. par〕rnam-par spaṅ/
gal-te med-na der zad mod/
gal-te yod-na chad-lta brlag/
この句は提婆の著作の中にはまだ照合できない。

㉑ 影印チベット大蔵経No. 5236, 5237, 5238
No. 5236. Pratītyasamutpāda-hṛidaya-kārikā-nama 縁起心頌 (北京版丹殊爾後編一七函 166 a⁵⁻⁶)
No. 5237. Pratītyasamutpāda-hṛidaya-vyākhyāna 縁起心解説 (同、168 b²⁻³)
No. 5238. Abuddha-bodhaka-prakaraṇa-vyākhyāna 不覚を覚せしむると名づくる論 (同、169 b⁴⁻⁵)

Ḥdi-la bsal-ba ci yaṅ med./
bshag〔D. gshag〕-par bya-ba gaṅ-yaṅ med/
(No. 5238. bsnan-par-bya-ba) (No. 5238. cuṅ-zad·med)
yaṅ-dag-ñid-la yaṅ-dag-lta/
yaṅ-dag·mthoṅ-bas rnam-par-grol/
此中無可見　亦無少安立
於真以観察　見真西解説
(大正蔵三二巻 490 b, 491 ab)

㉒ De-bshin-gçegs-pa rtag-tu skye-med-chos/
chos-rnams thams-cad bde-bar gçegs daṅ ḥdra/
byis-paḥi blo-can log-par ḥkhrul-pa-dag/
ḥjig-rten-dag na med-paḥi chos-la spyod/
この中第三句——の部分が mtshan-par ḥdsin-pa-dag. となっている引用句は後の修習次第章 (北京版 357 a³⁻⁴) に見られ、この句はまた、そのまま般若灯論第二十二章の最後に見られる。修習次第章のそこでは聖入一切諸佛境界経 (Ḥphags-pa saṅs-rgyas thams-cad kyi yul-la ḥjug) との経名が冠されている。
この経は西蔵大蔵経の中に蔵せられ、甘殊爾勘同目録 No. 768. 聖入一切諸佛境界智光荘厳大乗経である。そこでは
De-bshin-gçegs-pa rtag tu skye-med-chos/
chos-rnams kun kyan bde-bar-gçegs daṅ ḥdra/
byis-paḥi blo-can mtshan-mar ḥdsin-pa rnams/

ḥjig-rten-dag-na med-paḥi chos-la spyod/

であり、その中で、

kun kyan や rnams は問題はない。mtshan-mar ḥdsin-pa＝log-par ḥkhrul-paであるか如何かだけである。ḥdsin-pa＝bibhrati（平野、入菩提行論の索引）ともされ、三本の漢訳によっても本質的には同じと見て差支へない。

因みに、三本の漢訳というは、

法護訳如来荘厳智慧光明入一切佛境経と同本、曇摩流支訳の佛説大乗入諸佛境界智光明荘厳経と波羅頗蜜多羅訳般若灯論二十二章所引の偈文である。

法護訳「如来常不生　諸法又復然
　　世間無実法　愚癡妄取相」
（大正蔵一二巻 242 b）

曇摩流支訳

「如来無生法本常　一切法与善逝等
　　有所執相乃愚癡　無実法於世専転」
（大正蔵一二巻 257 a）

般若灯論には偈として別出してないが、

佛地経中偈言。

無起等法是如来　一切法与如来同
　　雖凡夫智妄取相　面常行於無法中
（大正蔵三〇巻 121 b）

と言う。

㉓ thams-cad stoṅ-paḥi raṅ-bshin don-dam. ni/
chon-can mi-dmigs chos-ñid yod-pa min/
shen-pa ldog phyir rkyen bçad ma gtogs-par/
chos-kyi ṅaṅ-la tshig-med brdsod-du med//

㉔ snoṅ-gyi mthas stoṅ phyi-maḥi mthas kyaṅ stoṅ/
skye-daṅ gnas-daṅ ḥjig-paḥi dios-pas stoṅ/
srid-pa thams-cad yoṅ-ye stoṅ-pa-ste/
phyogs-gcig stoṅ-ñid mu-stegs-can rnams kyi//

㉕ thams-cad nam-mkhaḥi mtshan-ñid-de/
nam-mkhaḥa-la yaṅ mtshan-med/
mtshan-ñid mtshan-gshi ṅes grol-pa/
dmigs-med khyod-la phyag-ḥtshal-lo//